

現場百景



大島大橋全景。見晴らしがいいだけに風も強く、橋桁は風の影響を受けにくい形状になっている。



中央にあるのが今回交換する支承。右側はメンテナンス用入口。

○水平支承
 支承とは、橋梁上下部構造間に作用する荷重を伝達する部材です。水平支承は、地震や風などによる橋軸直角方向(横方向)の動きを抑える役割を持っています。



橋の内部。大島大橋は水道や電話線などのインフラも通っている。



支承の組み立て現場。設置現場の準備と同時進行で造られていた。

大島大橋 橋梁補修工事

入梅しているというのに青空の気持ちのいい6月中旬、西海市の大島大橋を訪れた。西海市大島町と西海町を結ぶ橋として1999年11月に供用が開始されたこの橋は、供用から17年の月日が経ち、塗装の浮きや錆びなどが起きてきた。また、設計後、大規模地震がいくつか起き、道路橋の耐震基準も変わった。そこで、大島大橋では現行の基準に合わせるため平成28年から耐震補強工事を行っている。この度、水平支承(上部工と下部工の間に入れる部材)の取替が行われるということで現場を訪れたのだ。が、今期の工事は始まったばかりで具体的な作業を見るというより現場の確認と、工事概要を聞くにとどまった。

しかし、せっかくだからと、その支承を作っている大島造船の工場も見せていただいた。大きな建屋の中に置かれた支承はこれから鋼材の溶接に入るそうで、若い作業員たちがその工程を真剣な眼差しで確認していた。溶接は手順が重要で、うまく行わなければ部材が歪んでしまう。そうならないように細心の注意を払って溶接するのだという。

インフラは供用された時点で「使えて当たり前」となってしまう。だから、そこを使う際にいちいち意識することはほばない。今回こうして、支承を作っている現場と、それを取り換える現場の両方を見せていただいて強く感じたのは、橋を当たり前に通れるよう支えている人たちの存在だ。工場でのがんばり、設置現場でのがんばり、支えている人たちの「がんばりのリレー」があつてこそ、私たちはインフラを意識することなく使えるのだ。

次にこの橋を渡る時、工事はもう終わっているだろう。しかし、今回の取材で出会った人たちの顔を思い出しながら渡りたいと思う。



小島健一

「見学者」土木工事現場、産業遺産や工場などを一般向けにLIVEBや書籍、テレビで紹介。2011年10月から3年間長崎の離島「池島」で地域おこしを行い、長崎大学の研究員を経て、現在は鹿児島市の入来麓武家屋敷群で地域振興の芽を探している。著書に「社会科学見学に行こう」「ニッポン地下観光ガイド」などがある。

長崎県では管理する橋梁を対象に「長崎県橋梁長寿命化修繕計画」を策定しています。致命的な損傷を受ける前に小規模な補修をこまめに実施し、ライフサイクルコストを削減します。また、大規模地震に備え、緊急輸送道路上の橋梁の耐震補強を行っています。

西海市大島町
 【特産品】大島とまと、伊勢えび、あらかぶ、焼酎
 【観光地】百合岳公園

大島大橋
 L=1,095m

大島大橋
 西海市西海町と大島町を結ぶ海上橋梁
 ○橋 長 L=1,095m(うち斜張橋670m)
 ○開 通 平成11年11月11日11時11分11秒